レクチャー＆ワークショップ 2018.1.20-21

パフォーミングアーツを体感しながら学ぶ2日間

金言集

言葉と経験、
そこから得られた実践へのヒント

金言集

レクチャー＆ワークショップ 2018.1.20-21

パフォーミングアーツを体感しながら学ぶ２日間

はじめに ……1~2

プログラム ……3~4

Talk1. 沼田里衣 ……5~6

Talk2. いしいみちこ ……7~8

Talk3. 森田かずよ ……9~10

特別企画　梅田哲也 ……11

映像上映　中川真 ……12

Workshop.1 佐久間新 ……13~14

Workshop.2 佐藤拓道 ……15~16

Workshop.3 沼田里衣 ……17~18

おわりに ……19~20

講師プロフィール ……21~22

はじめに

一般財団法人たんぽぽの家が運営する「障害とアートの相談室」では、障害のある人の表現活動に関する調査、支援、発信に取り組んでいます。日常の創作活動の支援についての悩みや著作権等の権利についての問い合わせなど、奈良県内外からさまざまな相談を受けています。

私たちが大事にしているのは、課題を解決するだけでなく、障害のある人の表現活動を支えている人、活動に関わりたい人、興味を持った人たちと学び合いや交流ができる場をつくることです。そのなかで、障害のある人のパフォーミングアーツに関する調査・支援事業を実施し、多様な表現に取り組む意義や課題があきらかになってきました。

本冊子で紹介するレクチャー＆ワークショップ「パフォーミングアーツを体感しながら学ぶ２日間」を企画した第一の目的は、パフォーミングアーツを初めて学びたい人たち、あるいは、パフォーミングアーツのことはよく知っているが、新たな展開先を探し求めている人たちに、「パフォーミングアーツの多様性を伝えたい」というものでした。ここでいう多様性とは、次のふたつの意味に分けられます。

1. 表現の多様性

一口にパフォーミングアーツと言っても、演劇やダンスなど、いくつもの芸術ジャンルがそこに含まれています。また舞台で作品を発表する以外にも、発表の方法や場はさまざまです。本企画では、パフォーミングアーツとはこういうものだ、と最終的に一意に定義するための勉強会ではなく、まずは、幅広い表現形態の“体感”を通じて、パフォーマンスの多様性を感じてもらうことをねらいました。

2. 関わる人の多様性

いわゆるプロフェッショナル集団のなかで洗練された表現を追求している実践者ではなく、子どもや高齢者や障害のある人など、異なる背景をもつ人々と一緒にパフォーマンスをおこなっている実践者を中心に構成しました。そうすることで、福祉の分野で活動する人が、身近な「気になる人」の魅力に気づいたり、そのおもしろさを他者に発信できるような視点を得ることをねらいました。

この冊子は、レクチャー＆ワークショップに参加した人はもちろんのこと、参加できなかったけれど、福祉の現場／最前線において、パフォーミングアーツをこれから実践しようとしている人をおもな対象としています。できたら次の３点を意識して読んでほしいと思っています。

1点目 …… 実践のヒントを見出してほしい。

１月 20 日～ 21 日にたんぽぽの家で拾った言葉を閉じ込め、この冊子を開いた人が、その気になりさえすれば、いつでも宝となる経験を自分の持ち場で再生できるような願いを込めました。とりわけ２日目のワークショップの手順を詳しく書き記しています。自由にアレンジして試してみてください。

2点目 …… 仲間を見つけてほしい。

パフォーミングアーツはひとりでは成立しません。少なくとも、演じる人と見る人の最低でもふたり以上が必要です。自分以外に、もうひとり、気の合いそうな人を選んで、この冊子を紹介してみてください。ここには、パフォーミングアーツについてさらに学びたい人たちのために、注釈を添え、参考文献も紹介しています。これらの中身を一緒に吟味してみてください。

3点目 …… わからなくなることも大切にしてほしい。

アートを実践していくうちに、自分では知らないはずのことがふとわかってしまうということがあります。しかし、それと同じくらい、自分では知っているはずのことがふとわからなくなってしまうということも大切です。アートを学び、アートを自分のものとして肉体化するときには、このふたつの事態によく見舞われます。この小冊子のなかに、パフォーミングアーツのすべてを書き込めることなどできませんでしたが、それでもなお、ここに書かれた金言をとおして、「パフォーミングアーツのことがわかった！」という瞬間や、「なんだか余計にわからなくなってきました」という瞬間が、みなさんのもとへ訪れることを願っています。

1日目　トークセッション …… いろいろな取り組みを知る　1月20日［土］

実践者から、活動をするうえでめざしてきたこと、これからの願望などをききました。障害のある人だけではなく、異分野や異なるコミュニティと関わるからこそ見えてくる舞台表現の役割や魅力を探りました。

14:00~18:00

| コーディネート |　**大井卓也、中島香織**（一般財団法人たんぽぽの家）

| Talk 1 |　**沼田里衣**（大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授、おとあそび工房）

『動いている音楽：いろいろな価値観を楽しむ即興音楽』

即興演奏を得意とするミュージシャン、音楽療法家、知的に障害のある人の出会いによって 2005 年にうまれたパフォーマンス集団、音遊びの会。設立から 12 年にわたり代表を務めた沼田さんは現在、さらなる実験的な取り組みを展開しています。音楽にかぎらず、美術家やお笑い芸人など、他ジャンルの表現活動とのコラボレーションも積極的におこない、出会いから生まれた新しい音楽のかたちを提示しました。

| Talk 2 |　**いしいみちこ**（ドラマティーチャー、追手門学院高等学校 表現コミュニケーションコース教諭）

『表現教育は何を目指すのか：生きやすくなるための演劇教育』

教育の現場でドラマティーチャーを務めるいしいさんは、演劇界で活躍する演出家らと協働して、作品を送り出しています。福井県いわき市の高校で、劇作家、演出家の飴屋法水さんとともにつくり上げた舞台「ブルーシート」は岸田國士戯曲賞を受賞、大きな反響を呼びました。

| Talk 3 |　**森田かずよ**（女優、ダンサー）

『身体を再発見するダンス』

コンテンポラリーダンスやフラダンス、演劇と、さまざまなジャンルに挑戦する森田さん。舞台の途中で義足をはずして踊る、代表作「アルクアシタ」など、つねに自身の身体の可能性を探求しながら表現を続けています。障害のある人やない人の作品への演出や振付もおこなっています。

18:30~20:30

『国内外におけるパフォーマンスの映像上映＆美味しいごはんを囲んでの交流会』

| コーディネート |　**中川真**（大阪市立大学都市研究プラザ特任教授）

さまざまなパフォーミングアーツの映像記録をとおして、多様な取り組みを共有しました。ひとりでじっくり鑑賞するのもいいですが、ここでは、集まった人とともに語り合いながら、一緒に楽しみました。

2日目　ワークショップ …… じっさいに動いてみる　1月21日［日］

2 日目となった午前中は、「うごく」「えんじる」「きく」の 3 つの部屋に分かれて、ワークショップをおこないました。午後からは体験したことを言葉にして、振り返りました。いつもとは少しちがう感覚で 1 日を過ごし、参加者それぞれのこれからの活動のヒントを探りました。

10:00~12:00

Workshop 1 うごく

生活の動きから生まれる「表現の素」を共有し、即興的な動きから生まれる豊かな関係を体験することで、私たちが持っていた「ダンス」の概念をひろげました。

…… 佐久間新（ジャワ舞踊家）

Workshop 2 えんじる

障害のある人とつくる演劇の可能性とは？たんぽぽの家のスタッフでありながら各地で俳優として舞台に立つ佐藤さんから、福祉施設における演劇の役割について、具体的に学びました。

…… 佐藤拓道（俳優、たんぽぽの家スタッフ）

Workshop 3 きく

他人の音に耳をすますところから、コラボレーションは始まります。数々の公演やワークショップから得た経験やノウハウを共有しました。

…… 沼田里衣（大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授、おとあそび工房）

12:00~13:30　**ランチ**

13:30~15:00
| 振り返り |

午前中のワークショップの参加者から、「わたしの体験したこと」を話してもらいました。各部屋の講師とともに、感じたことや思ったこと、疑問に感じたことなどを共有しました。

特　別　企　画

『福祉施設をあそぶ』

福祉施設そのものを使って、多様な表現を実感する試みです。身近なものを使って、景色や人のふるまいをさりげなく、大胆に変えてきた美術家の梅田哲也さんの、現実を豊かに楽しむ視点を共有しました。

…… 梅田哲也（美術家）

＊期間中、Good Job！センター香芝から＜**Good Job Coffee**＞の屋台が登場。
温かい飲み物でほーっと一息つきながら、トークやパフォーマンスを楽しみました。

Talk 1

動いている音楽：いろいろな価値観を楽しむ即興音楽

沼田 里衣……［大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授、おとあそび工房］

トークの前半では、沼田さんが取り組んできた音楽療法研究や、コミュニティアート、アーツマネジメントなどの各種研究の背景や歴史、問題点などが紹介されました。例えば、イギリスの音楽療法研究では、「セラピーからコミュニティへ」という動きがあったということなどを知ることができました。後半は、沼田さんが代表をしていた「音遊びの会」や2014年に立ち上げた「おとあそび工房」の実践報告がなされました。研究や実践をとおして沼田さんが大事にしている自由とは何かが、私たちに問いかけられました。

フリー・インプロヴィゼーション、それはそれで固まっているな。自由を求めて、といいながら、自由じゃないな、と感じていた。

☞ フリー・インプロヴィゼーションとは、ジャズや現代音楽などにルーツを持つ、自由な形式の即興演奏である。1960年代、音楽家たちが従来の音楽スタイルから自由になろうと模索するなかで生まれた。詳しくは、デレク・ベイリーの『インプロヴィゼーション』（工作舎）などを参照されたい。沼田さんからこの言葉が出たのは、彼女が神戸大学の大学院生のときに立ち上げた「音遊びの会」（2005.9. ～）の活動を紹介するときであった。沼田さんのこれまでの活動は、つねに、音楽における自由とは何かを探し求めているように思われる。

静かにできないのではなく、
静かにしない。
雑音ではなく、
ノイズ・ミュージックである。
終われないのではなく、
終わらない。
舞台に出られないかも？
問題ありません、
「放置」という演目だから。

☞ 世間で評価されていることの価値を反転させることが、「音遊びの会」の音楽づくりで大切にしていることのひとつである。「音遊びの会」では、「知的な障がいのある人たちを募集し、実験的な即興音楽の分野で活躍するミュージシャンや地域の即興演奏家、そして音楽療法家を招待して」一緒に音楽を作る活動をしてきた。（公式サイト http://otoasobi.main.jp/aboutoto.html より）

障害のある人とミュージシャンでつくる即興音楽、という固定的な枠組みをくずしたい。

☞ 沼田さんが2014年に立ち上げた「おとあそび工房」では、「障害のある人とミュージシャンでつくる即興音楽」という「音遊びの会」の活動枠組みをさらにくずした。プロのミュージシャンをゲストで呼ぶと、どうしてもプロとアマという構図が現れて、障害のある人とない人を区別した音楽づくりとなってしまう。そこで、「おとあそび工房」ではゲストを呼ぶにしても補助的な役割にとどめ、プロ－アマ、障害のある人－ない人、という軸とは別の視点で音楽づくりを始めたという。

ジル・クレマンの「動いている庭」。ごつごつした石、コンクリートの屋上。雑草、雑多なものがある。ここで幸せを感じた。

☞ ジル・クレマンは、1943年、フランスに生まれる。庭師、修景家、小説家など、数多くの肩書きをもつ。代表的な庭園論に『動いている庭』（みすず書房）がある。「草や木が自然の遷移の作用として移動し、その移動のダイナミズムの中で庭が構成されていく。それは自然なのか、文化なのか？ 自然に寄り添い、かたちづくられ、変化し続ける庭は、従来の自然と文化を截然と切り離す二分法に基づく思考の再構成を促すものである」（ドキュメンタリー映画『動いている庭』特設サイト、http://garden-in-movement.com/ より抜粋）。沼田さんはフランスにあるクレマンのつくった庭を実際に訪れた。そこで得た感じというのは、おとあそび工房の活動、舞台づくりを考えるうえで、大事にしていることと重なってくると思ったという。

Talk 2

表現教育は何を目指すのか：生きやすくなるための演劇教育

いしいみちこ……[ドラマティーチャー、追手門学院高等学校 表現コミュニケーションコース教諭]

東日本大震災の経験、福島のいわき総合高校の教員時代の話、また、現在教えている大阪の追手門学院高校の表現コミュニケーションコースの取り組みが紹介されました。表現教育としての演劇という観点からの報告でした。いしいさんの考える、演劇教育の目的は、俳優育成・ダンサー育成ではありません。教室のなかで、できるだけとびぬけないようにして、多様性を受け入れるマインドになかなかなれないでいる生徒たちの意識を変えるべく、いしいさんは日々奮闘しています。

エネルギーあふれたからだがあるのに、じっとさせることに意味があるのか？

☞ エネルギーあふれたからだがあるのに、じっとさせることに意味があるのか？本当に何をやったらいいんだろうと、生徒たちを前にして悩んでいたときに出会ったのが、演劇だった。ただの国語教師が、演劇をとおして人間教育をすることになった。いしいさんの演劇づくりでは、まずは身体・基礎訓練に力を入れ、からだの内実を敏感に感じることを最初にめざす。フィジカルを重視し、最後の最後で言葉へと持っていく。大げさな表現は求めずに、生徒と対話を重ね、その人自身から生まれてくるもの、その人自身が生み出すものに着目する。

本当は、逃げなさいと言おうと思っていたのに、その生徒たちのようすに心打たれて、与えられた場所で何ができるか考えようと、言ってしまった。

☞ いしいさんは福島県出身で、2011年の東日本大震災当時は、福島県のいわき総合高校で演劇教育（表現教育）に携わっていた。同校は高校演劇コンクールで全国大会に行くほどの強豪校であったが、震災とそれに付随する福島第一原発事故の影響により、避難を余儀なくされる。2カ月遅れで学校が再開されたとき、全校生徒を前に最初にかけた言葉が、上の言葉である。いしいさんは、静まり返って大人たちの最初の一声に耳を澄ませる生徒たちの様子に、圧倒されたという。

私たちはものすごく怒っていた。

☞ 東日本大震災の被災地に生きる当事者たちの感情。いわき総合高校の生徒たちと劇作家、演出家の飴屋法水とが対話を重ねて劇づくりをしていたときに覆われていた感情を、ひと言で言い表した言葉。そのときにできた『ブルーシート』という作品（初演2013年）は、演劇界の登竜門となる第58回岸田國士戯曲賞を受賞した。当時の様子は、著書『高校生が生きやすくなるための演劇教育』（立東舎）に詳しくまとめられているので参照されたい。なお、いしいさんが現在教えている追手門学院高校でも、例えば、多田淳之介（東京デスロック主宰）との『ロミオとジュリエットと僕達と夏』や前田司郎（五反田団主宰）との『低速ヒロインGO』など、生徒たちと実力ある演劇人によって共同作品がつくられている。

彼女も最初はやりたくなかった。言ってもわかってくれないから、というのが理由。

☞ いしいさんが一番大切にしているエチュードに、「自画像」というものがある。「自画像」では、生徒が自分自身と向き合い、自分で演技を組み立て、ひとりで舞台に立ち、自己紹介するところまで持っていく。このエチュードに取りかかる際に、抵抗感を示したある生徒のことを紹介したのが、上の言葉である。いしいさんは、やれ、とか、やるな、とかは言わずに、なぜやりたくないと思ったのか、一緒に掘り下げていった。福島では自殺者も増えている、何も言わずにただ死を選ぶ人たちがいることも話しながら、一緒に泣きながらつくっていった。もちろん言いたくないことを無理に掘り下げることは決してしない。のちにその生徒は、自分の葛藤を浮き彫りにする「自画像」作品を披露する。トークではそのときの映像が放映された。

Talk 3

身体を再発見するダンス

森田かずよ……[女優、ダンサー]

先天性の障害をもって生まれた森田さんのトークでは、女優、ダンサーになるまでの話、女優、ダンサーになってからの話、そして、すべてに一貫してある、相手や自分のからだをどう把握するのかという問題が語られました。さまざまな作品に出演したり、ワークショップをしたり、他の表現者たちと関わることで、その問題は深められていきました。

肋骨が3本なく、肺が人の半分、肺活量は750くらい。右足には義足をつけている。骨格、それ自体が想像つかない。そこで、自分のからだのフィギュアが欲しいという欲望が出て……

☞ 私たちの身の回りには、フィギュア、マネキンなど、「モデル」となる身体像があふれかえっていて、つい自分に都合よくそれらと自分とを同一視して、自分のからだのことは分かっている気になっている。しかし、考えてみれば（というか、服を選ぶときなどは考えなくとも）、モデルと同じようなプロポーションを持つ人などほとんど存在しないのである。森田さんは、3年がかりで自分のフィギュアをつくってもらい、作品に用いた。それによって自分の骨格がつかめたかといえば、実はつかめなかったそうだが、作品としては強いものがつくれたという。

☞ 自ら振付し自ら出演したダンス作品「アルクアシタ」のモチーフを説明しているときの言葉。初演は2012年2月2日、奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2011-2012「鹿の劇場」。「このころから、車いすを使い始めた。私にとって、義足をはめているときと、はずしたときとでは、全然違う感覚。義足をはずすというときの感覚の違いを見せたかった。とはいえ誤解なきよう。障害を見せたいわけではない。からだが違うということを伝えたかった」と森田さんは語る。彼女にとって障害とは、すでに備わっているものであり、個性ではなく事実そのものである。だからこそ、障害のあるからだを晒し、それにより見えることは何か、何を見せるのかを常に考えている。障害のあるからだを晒したいのであって、障害を見せたいわけではないという森田さんの言葉は、小林秀雄の主張「美しい『花』がある、『花』の美しさといふ様なものはない」（『当麻』より）を想起させる。ここでいう花の概念は、世阿弥の『風姿花伝』に由来するので、あわせて読まれたい。

とはいえ誤解なきよう。障害を見せたいわけではない。

子どもは残酷なので、「気持ち悪い」「嫌い」とか普通に言ってくる。そういう子どもたちとこそ、ワークをしたい。

☞ 子どもとのワークショップについて語った言葉。森田さんは、自分が舞台で踊る、演じるだけでなく、障害のある人、高齢者、子どもたち、等々、いろいろな身体を持つ人たちに振り付けをしたりワークショップをおこなう機会も多い。高校生のときに宝塚の舞台を見て、自分も舞台に立ちたいと決意した。それ以来、目の前に壁が立ちはだかる度に、「障害者は、お芝居してはいけない？踊ってはいけない？表現してはいけない？」と、くやしさをばねにしてこれまでやってきた。しかし最近は、他者との協働を通じて、人は、違うからだをどう受け入れるのかという問いが生まれ、それがさらに他者との協働を求めるというサイクルができている。

☞ 2020年の東京オリンピック、パラリンピック開催に向けて、スポーツや芸術文化振興のための支援の機会が増えている。そのなかで森田さんは、障害者の芸術文化支援に対する現行の施策に対して違和感をおぼえるという。これは、大学で4年間演劇部に所属、その後、大阪にあるミュージカルスクールに入学し、タップダンスや能など、服を着てみるような感覚で、いろいろな分野の表現に挑戦している森田さんならではの貴重な意見である。

トップアーティストを育てることと、裾野を広げるための支援がいっしょくたにされてしまう。スポーツでは考えられない。

缶とコンロのパフォーマンス

梅田哲也（美術家）

自作の筒状の缶のなかに、梅田さんはある媒質とある物体をおもむろに入れ、ガスコンロの火の上にかけました。しばらく経つと、缶のなかから、今まであまりきいたことのない類の、どこからともなく響いているような音がきこえてくるようになりました。会場は大盛り上がり。のぞき込んだり、なかの空気を吸ってみたり。各々のやり方で、不思議な音を楽しみました。その後、これまでおこなったパフォーマンスやインスタレーション作品を写真や映像で振り返りながら、自身の作品づくりで大前提としていることについて梅田さんは語りました。

彼女[注1]は、僕のやりたいことを全部言ってくれた。僕は、（彼女のように）自分の思いを表現することはできなくて、**でも彼女のように言葉は持てなかったけれど、作品はつくってきた。作品はつくれるぞ、と。そしてそれは実はとても簡単にやれることだと思うんです。**最初のころは、自分のつくった動くオブジェを、こわれるまでずーっと観察するようなパフォーマンスをやっていた。僕の作品の大前提として、ひとりとして同じものを見ることができない。きくことができない。中心をおかない。指揮をとる人、音頭をとる人がいない。いたとしても次々変っていく。完成形がない。**体験のほうが大きくなって、体験に理解が追い付かなくなる。**緊張感のある時間。シンプルな構造の出来事が、3つ以上重なると、カオスになる。それぞれの人のもっているカウントの間合いは違う。ポリリズム。音楽的なトリック、ロジックをもっていて、ときどき合うような動きを入れている。立場とか関係性が入れ替わる。覚える覚えないにかかわらず、注意すべき人にかならず注目するようになる。**どんなうまい人でもうまくやれない振り付けになっているが、一方でそれはルールを知らなくてもできてしまう。**

注 1

いしいみちこさんのトークで放映された「自画像」作品に出てきた生徒のこと。彼女は、ともだちの何気ない言葉のなかに自分への憐れみを感じたとき、自分はかわいそうじゃない、人からかわいそうだと思われたくないということを言いたくても言えなかった。言ってもどうせわかってくれないから言わないというかたちで自分を閉じた。しかし、別のともだちが、自分が言いたくても言えなかったことを言ってくれた。「ありがとう」と思った。自分もそうありたいと思った。自分を開くこと、表現することが、自分が、人のために出来ることだということに気づいた。彼女は「自画像」で、その心の動きを、具体的なエピソードとともになぞっていった。言ってもわからないであろうことこそ、表現する。「言っても、わかってくれない」という命題は、「わかってくれるとしても、言わない」という命題と論理的には等しい。梅田さんは、彼女のやり方とちょうど正反対だが、やりたいこと（表現のモチベーション）は同じであるのかもしれない。

映像記録で振り返るパフォーミングアーツ

中川真（大阪市立大学都市研究プラザ特任教授）

交流会で放映された映像のなかには、中川さんが撮った、バリ島の儀式で、地元の若者がトランス（全身の痙攣を伴う変性意識状態）にかかっていく瞬間をうつした映像があった。**トランスがおこる背景には必ずコンテクスト（文脈）がある、**とのこと。提供される世界を信じているということが、トランス状態に入るための前提条件としてあるそうだ。このコンテクストを無視して、例えば、バリ島で流れていた音楽だけを切り離して日本で演奏したとしても、誰もトランスには陥らないと中川さんは述べた。日本でも、1997 年 12 月にテレビアニメ『ポケットモンスター』を見ていた子どもたちが、全国各地で同時に何人も倒れ、病院に運び込まれるという事案が起こった。これも、子どもたちがポケモンの世界を深く信じているからこそ起こったのだということだ。アートの受容にとっても、コンテクストは大事である。どんなに伝えたいことがあっても、受け入れるコンテクストがなければ、伝わらない。逆に、作者は表現をしているつもりがなくても、受け手が勝手にコンテクストを当てはめ、結果的に感動してしまうこともある。特に、障害のある人の表現の世界では起こりがちだ。それは、良い悪いを超えたところにある、アートが本来もつ仕組みそのものともいえる。

続いて、中川さんが設立したマルガサリ（ガムラングループ）とたんぽぽの家のメンバーとのあいだで共同制作された作品『さあトーマス』[注1]に関する映像が放映された。エイブルアート・オンステージ[注2]の一環である、2005 年初演時の、稽古から本番に至る過程をうつしたダイジェスト記録映像である。「**これだけ見たらすごくいい感じでしょう？ でも、よいところだけに焦点をあてて編集されたのかもしれない、それでいいのかなという気が今ではしています**」と中川さんは振り返る。

パフォーマンスはその時間、その場所で起きていることを体験するのが醍醐味のひとつである。しかし、その場で起きたことを記録し残していくことは、パフォーマンスをつくるのと同じくらい重要ではないだろうか。

注 1

2004 年度に実施された。障害のある人と演奏家、アーティストたちが、対等な立場で音楽、演劇、美術をつくり上げていく、先の読めない実験的な舞台作品。経緯や制作過程は、『生きるための試行：エイブル・アートの実験』（フィルムアート社）のなかに、中川さんによりまとめられている。

注 2

明治安田生命社会貢献プログラムとして、NPO 法人エイブル・アート・ジャパンと明治安田生命保険相互会社が共同で 2004 年度から 2008 年度にかけて実施した、障害のある人との舞台表現支援プログラム。2009 年度にメセナアワード 2009 メセナ大賞部門「ベスト・コラボレーション賞」を受賞した。

Workshop① **うごく** 佐久間新 ジャワ舞踊家

佐久間さんは、2006年から定期的にたんぽぽの家に通い、メンバーやスタッフとダンスをしている。この日のワークショップでは、からだを大きくまたは小さくゆらし、息が音に、音が声に、声が言葉になる瞬間を探った。何が互いを分けるのか。繊細に、自分のからだや他者との関係をじっくり楽しんだ。

風呂に入って、「あぁ〜」とかは言うが、「いい気持ち」とか、「ごくらくごくらく」とか、僕は絶対に言わない。 by 佐久間

ワーク概要

①相手のからだをそっとつかんで、ゆらゆら回す

ペアを組み、一方がもう一方の頭をそっとつかんで、ゆらゆら回していく。そのうち、少しずつ大胆に、肩、腕、腰など、頭以外の他の部分をつかんで揺らしていく。「相手のからだがどうなっているんだろう、相手のことを知りたいと思いながら」

②ゆっくり歩く

ジャワ島のダンスにはいろいろあるが、そのなかの「ゆっくり歩く」ということをやる。「上半身はリラックス、じわーっと、頭はすーっと前にくる。そーっと足を延ばして、背中はまっすぐしたまま、じわーっと」

▲目をつむってゆっくり歩くワークの最後は、触れた人と手をつないでいって終わった。

③目をつむってゆっくり歩く

目をつむってゆっくり歩いてみる。ずっと目をつむってもいいし、ちょっと目を開けて、見てみてもいい。ただ、走ったりはしない。ちょっと怖いようだったら、目を開けていてもいい。

①と③は佐久間さんが、オーストラリアで3週間、障害のある人とダンスを作り、発表したときの経験がもとになっている。参加者の中に盲ろうの人がいて、目をつむってゆっくり歩くワークをした際、その人が怖がるどころか、すごく気持ちよさそうに音楽にあわせて歩いていて、不思議だった。話を聞いてみると、全員がゆっくり歩いているのが確認されたら、怖くないと答えた。あ、そうか！と思ったという。

ワーク概要

④息と声の差を味わう

たんぽぽの家には、家ではしゃべるのだが、人前ではしゃべらないというメンバーがいる。はーっ、しゅーっとかは出るけど、「はい」は出ない。この差はなんなんだろう。みんなで探ってみる。

（ｉ）息が声になる瞬間を探る。大きく息を吸い込んで、息を出し、それが声になったと思った瞬間、やめて、また大きく息を吸い込んで、息を出し、それが声になったと思った瞬間、やめることを繰り返す。

（ii）出てきた音をキープする。「息を大きく吸い込んで、息を出して、少しでもそれが音になったら、声帯がこう、あ、あ、あ、と出た音をキープして、あーーーーー、という感じで。ぎりぎり出た音をキープする」 このとき、前日おこなった梅田さんの缶とコンロのパフォーマンスで出てきた音と同じような音色の声がきこえてきた。

⑤よだれが出るほど顔を弛緩させる

たんぽぽの家の、別のメンバーで、顔がリラックスしていると、口もとがゆるんでなんともいえない、いい笑顔のような表情をする人がいる。別の言い方をすると、電車で寝ていて、顔がだら〜っとなって、よだれが出るような感じを試してみる。コップはよだれ受け。唇は、だら〜んとさせる。リラックスしてきたら、その状態を保ち、なるべく力が入らないようにする。息を出したらそれが声になるみたいな感じで、やってみる。

⑥ひとりごとを言う

息をはーっとするのと、息が音声に変わるのとでは違うように、誰の耳にも届かないのに、ひとりごととして言葉を発することが本当にあるのかどうか、あるとすれば、それはどういうことなのか味わってみる。

（ｉ）5分くらい、周りの人に出会わないところに出かけて、思ったことを発音してみる。

（ii）もう1回ここに戻ってきて、ここで言ってみる。みんなで集まってやってみて、やっぱり真正のひとりごとを言っているみたいに、言えるかどうか。

参加者は、ひとりごとを言う派と言わない派に分かれた。ひとりごとを言わない派の佐久間さんから発せられた、「あ、しまった」、「ドキドキ」、「ぐふ、ぐふ」等々の言葉をきいたとき、まるで、下手な芝居を無理やり見せられているようなおかしみと気はずかしさを感じた。

参加者の言葉

- わざとぶつかろうと思っても、ぶつからなかった。足音をきいて、みんな逃げていった。（目をつむってゆっくり歩くワーク）
- 音を敏感に感じていた。足音はしないけど気配を感じたりとかも。ぶつかりたいような、ぶつかりたくないような。手を触れたら怖いけど、「あ、壁か」と安心したり。安心感と不安とが入り混じったような不思議な感じだった。（目をつむってゆっくり歩くワーク）
- 自分の声帯は楽器なのかといえば、そうではない。楽器は意識。音を出そうと意識している。ここでやったことは、意識して起こすことはできない。息がいつの間にか偶然音になる。しかもそれが声へ変化したと意識した瞬間にやめる。変化というのは意識的に把握されるものだから、もう一段難しいことをやっている。（息と声の差を味わうワーク）

Workshop②

えんじる

佐　藤　拓　道
俳優、たんぽぽの家スタッフ

佐藤さんは、先鋭的な舞台に出演してきた俳優である。ふだんは、たんぽぽの家アートセンターHANAのスタッフとして、日々、メンバーたちのケアに関わりつつ、演劇プログラムも担当している。この日のワークショップは、たんぽぽの家のメンバーに好評のワークを中心に組み立てた。

言葉が生まれてくる風景を込みにして発話すること。by佐藤

ワーク概要

①自己紹介＋好きな寿司ネタ

簡単に自己紹介する。それにプラスして、好きな寿司ネタについて必ず言う。それがその人の名前になる。

②人に向かって歩いていき、名前を覚える

相手の名前（寿司ネタ）を言ってから、その人に向かって歩いていく。近づかれた人は、また別の、自分が近づきたい人の名前を言ってから、その人に近づく。それを繰り返す。周りで言われている名前をききつつ、相手がどんなものを好きなのかも含めて、名前を覚え合う。

③息でキャッチボール

息をボールに見立てたキャッチボールをする。誰に向かって息を投げるのか、どう受け取るのかがポイント。ふわっと投げたら、ふわっと受け取り、スピードよく吹きかけたら、すっと受け取るなど。障害のある人の中には、本物のボールを使った、いわゆる普通のキャッチボールができない人がいる。そこでウォーミングアップとして、息を使ったキャッチボールをすることになった。それが好評だったので、ここでもやってみた。

④空気を読んで発語する

参加者6人が輪になって、1、2、3と数字を読み上げていく。ひとりあたり2回数字を言わなければならない。誰かと同じタイミングで、数字を言ってしまうとアウト。12まで読み上げることができたらセーフ。最初途中で何回か詰まってしまったが、佐藤さんが、「みんな、それぞれがどのタイミングで言うか、感じながらやりましょう」と言ってからは、一発でできるようになった。

ワーク概要

⑤ボールを投げる

▲実際に本物のボールを投げたり取ったりすることと、投げる振りや取る振りをすることとの差は、いったいどこにあるのだろうか。

まずは、本物のボールを使って、キャッチボールをする。その後、ボールは持たずに、ボールがあるかのようにキャッチボールする。次に再び、実際に本物のボールを持って、キャッチボールをする。ボールがなくても、まるで本物のボールがあるかのように演技することが目的ではなく、ボールがあるときとないときの差を実感するためのワーク。これは劇作家、演出家の平田オリザのワークショップを参考に、佐藤さんがアレンジしたものである。
佐藤さんいわく、ボールがないときのキャッチボール動作は、車いすに乗っているメンバー間でもすごく上手にできる。次に本物のボールを導入して、実際にやってみると、全然うまくできない。とりこぼしてしまう。ボールが取れないときにこそドラマになる。とりこぼしたときの感覚を覚えておくことが大事。

⑥この日、初めて人としゃべったときのことを話す

（ｉ）まったく同じことを繰り返す
ペアを組み、この日、初めて人としゃべったときのことを1分間かけて、一方が他方に話す。まったく同じことをもう一度繰り返す。つまり、しゃべるほうも1回目と同じようにしゃべり、きく方も同じリアクションをするようにする。

（ii）きいたことをコピーして、自分の体験として繰り返す。
ペアを組み、この日、初めて人としゃべったときのことを1分間かけて、一方が他方に話す。ここまでは（ｉ）と同じだが、次に、話をきいていた人が、それをコピーして、まるで自分が体験したかのように相手の話を繰り返す。

（ｉ）の1回目は、何をしゃべろうかを考えているから、会話がなされた当時の映像が思い浮かんでいるはず。しかし、2回目となると、その部分がなくなり「端的」な表現になり、再現時間が短くなり、時間が余ってしまう。なので、ここの部分をなるべく広げるよう意識する。（ii）の2回目も同様。
セリフがあって話すのではなく、自分がしゃべったことや他人がしゃべったことと同じことをもう1回やって、その時に何をやっているのかを感じるためのワーク。これは劇作家、演出家の岡田利規のワークショップに基づいている。演技で大事なことは、セリフをしゃべっているのではなく、言葉が生まれてくる風景を込みにして発話すること。どうしゃべるかというよりも、そこにいること、舞台のうえに、その人としていかに在るかが問われる。

⑦吊り橋のエチュード

即興芝居のためのエチュード。どうしても向こう岸に渡りたい人が、両端からやってきた。それぞれ中央に進み、ぶつかったところで、お互いに、どうしてもこの吊り橋を通過したい理由を主張する。相手の話に説得されたら、通してあげてもいい。これは、自分の主張に集中することが目的でも、また、相手に勝つことが目的でもない。相手から話を聞き出し、即興で面白いやりとりをすることが目的。かたくなになると、会話もつまらないものになってしまう。

参加者の言葉

- ボールありのときはすごく自然で、動きにばらつきがあったのに、ボールなしの場合は動きが画一化してしまう。意図的に何かをしようとすると、同じような行動が出てしまうのが印象的だった。（ボールを投げるワーク）
- 人から与えられたことを再現するのが演技だと思っていた。しかし、今日のワークをしてみて、そうでないことが分かった。自分のなかの感覚をすごく敏感にして、自分でこういうふうにやってみようと思ったことができた。

Workshop③

きく

沼田里衣
大阪市立大学都市研究プラザ
特任准教授、おとあそび工房

はじめに、沼田さんから「きく」ことについての話があった。即興で音楽をするとき、どんな音を出すかということを意識しがちだが、実はきくことも大切だ。また、言葉で振り返ることにも時間をかけたいということで、ワークがひとつ終わるごとに、演奏者や演奏をきいていた人に、どんなことを感じたか、問いかけた。ワークショップは、参加者のなかから出てきた言葉から演奏のテーマをその場で決めて進んでいった。

▼音で自己紹介を試みる参加者。

ワーク概要

①楽器で遊んでみる

この日用意していたのは、木琴（低音のものと、高音のもの）、鉄琴、タンバリン、ウッドブロック（木製の打楽器）、マラカス、ボナンとサロン（インドネシアのガムラン楽器）、鳥の形をした笛など、おもちゃの楽器から本格的な楽器まで。お気に入りの楽器を持参していた参加者も。まずは5分ほど、それぞれ自由に楽器に触れてみた。

②音で自己紹介する

ひとつでも複数でもいいので、好きな楽器を選び、音で自己紹介をした。

参加者の言葉

- 普通に演奏していたのに、あるとき楽器をくるっとひっくり返して演奏していたのを見て、楽器から素材になったと感じた。
- 演奏しながら、きいている一人ひとりに向けて、話しかけているみたいだった。
- メールでしかやりとりしていなかった人に今日初めて会って、演奏をきいて、ああこういう人だったのか！と納得した。
- 自分は、ただ、音でストーリーをあらわしたかった。
- 本当は、同じ楽器を100個ならべてやってみたかった。
- やっているうちに、わらべ歌を思い出して、途中からそのメロディーを演奏した。
- 自分はふだん演奏しているときに、自己を出さないことをテーマにしてやっているが、あえて、楽器で自己を出すようにしたのが、印象的だった。
- おもちゃ屋をやっているので、おもちゃの楽器だけで演奏した。

参加者の感想をきいていると、演奏のテーマになりそうな言葉が出てきたため、これらの感想から次の演奏テーマを決めていくことになった。

ワーク概要

③自己を出さない演奏をする、合議的に終わる

ふだんから演奏活動をしている参加者が、「自分のやっているインドネシアの音楽、ガムランでは、演奏中自己を出さないのが基本」と話していたことを受けて、みんなで自己を出さない演奏をしてみることに。また、「ガムランでは、音を変えるタイミングなどは、言葉を使わず演奏のなかで合議的に決まっていく」という話もあったので、演奏を終えるタイミングをそのようにやってみることにした。
偶然、ウッドブロックが人数分あったため、全員で同じ楽器を持ち、輪になって、自己を出さない演奏を試みた。コンコンコンという音がホールに響き渡った。周りの音や様子を気にしながら自分の音に耳をすまし、それでも自己を出さずに演奏するという、ほとんどの参加者が初めて体験する演奏。ピタッと音が鳴りやんだ後、笑い声とため息がもれた。

参加者の言葉

- どうしても、ここで目立ってみようかな、とか、ちょっと人と違う叩き方をしてみようかな、などと思ってしまって、自己を出さないというのが意外と難しかった。
- 終わりのタイミングは思ったよりも、すんなり終われたように感じた。
- 演奏をしたとき、他の人の音がよくきこえてきた。自己を出さないストレスはあったものの、本当に充実していた。

ワーク概要

④楽器から素材へ、道具から楽器へ

音で自己紹介した際に出た、「楽器が素材になった瞬間を感じた」という感想を受けて生まれた演奏のテーマ。「楽器から素材へ」チームと、その逆の「道具から楽器へ」チームの2グループに分かれて発表した。テーマの解釈は個人に委ねられていたため、グループで実際に演奏しながら徐々にグループごとの共通理解が形成されていった。
はじめに、「楽器から素材へ」チームの演奏。楽器ではなく素材と捉えはじめると、あちこちに打楽器のバチを転がしたり、木琴の鍵盤をただ拭くだけなど、アプローチが多様になった。すると、普段きくことのない音がきこえてきた。終盤では、マラカスをキャッチボールのように投げ合い、セリフこそないものの、身振りや表情を交えて「素材」と化した楽器で、演劇をするような展開になった。
「道具から楽器へ」では、まずは自分の選んだ「道具」である、目の前の楽器を思い思いに鳴らしていた。それぞれが楽器と対峙する時間が続いた後、あるとき演奏者全員が互いの音を意識しているような瞬間がおとずれた。

参加者の言葉

- ふだんは演奏をきく側なのだが、いざ自分が演奏してみると違う音がきこえてきたり、全体が見えてきたりした。
- 「道具から楽器へ」をきいていたとき、人類が初めて楽器というものに出会って使い方を習得していく一大叙事詩のように感じた。まるで映画『2001年宇宙の旅』のようだった。

これちょっとどうなるのなかなってときに、急にまわりの人の音がきこえだしたときがあったんですよ。初めて共演する人どうしだから、熟成期間を経て、とろっとしてきた感じなのかな。 by 沼田

おわりに

パフォーミングアーツを学ぶといいながら、ここには、誰もが知る物語や人物の名前がほとんど出てきません。それどころか、ダンスのワークショップでは、よだれが出るまで顔を弛緩させたりしています。「本当にこれらの実践をアートといっていいの?」と心配になった人もいるかもしれません。しかし「障害とアートの相談室」では、今回のレクチャー & ワークショップの意義を次のように考えています。

1. 自分の発見を大切にする

初日の梅田哲也さんのパフォーマンス。缶をコンロにかけ、しばらくすると得も言われぬ不思議な音が出てきたとき、純粋に「おー!」とうれしくなりました。翌日の、佐久間新さんのワークショップ。息を吐き出していくと、途中から音に変わる瞬間が確かにあります。その音をキープすると、梅田さんのパフォーマンスできいたときのような不思議なコーラス音があたりに鳴り響きました。
からだの仕組みや、パフォーマンスを可能にする物質性、精神性といったことが、具体的に把握できたような気がします。自分が発見したことを、みんなにも見てもらい、それを見た人が別のやり方で確認していく。パフォーミングアーツはこのように伝染していきます。自分のフィギュアをつくって自分のからだを把握しようとする森田かずよさんの作品づくりも、自分だけの小さな発見を大切にすることから始まっているように思います。

2. 自分たちで自分たちの物語をつくる

かつて芸術家たちの前には大きな物語がありました。例えば、ギリシャ神話、宗教音楽、宗教画などで描かれる物語です。芸術家たちの手によって、時代や地域によって形を変えながら表現されてきたそれらの物語は、人々のあいだで語り継がれ、文化の伝承がなされてきました。しかし、近代から現代にかけて起こった芸術運動では、これまでつくってきた大きな物語を芸術家みずからどんどん解体していく流れが見られました。
物語がなくなってしまったのでしょうか?　いいえ。自分たちの小さな物語を語っていいのだということに私たちは気づいたのです。どんなにささいなことでもかまいません。自分たちで自分たちの物語をつくり、やりたいことをやっていいのです。佐藤拓道さんのワークショップでやったような即興パフォーマンスのつくり方がきっと参考になると思います。また、自分の人生を自分が演じることで素晴らしい「自画像」作品をつくり上げた、いしいみちこさんの生徒のことも思い出してみてください。

3. ないないづくしを楽しむ

とはいえ、何をやったらいいのか、いざやってみようと思うと悩んでしまうこともあるかと思います。うちにはグランドピアノがありません。立派なホールもありません。仲間も今のところいません。しかし、そういうときこそ、おもしろい作品をつくるチャンスです。
そもそもパフォーマンスは、何もない空間でも、からだひとつあればできてしまいます。まずは身軽にそれを楽しみましょう。価値観を逆転することは、沼田里衣さんの得意とするところです。「ない」ということの先に、存外豊かな世界が広がっているかもしれません。当たり前だと思われていることを疑ってみましょう。
また、仲間はいるに越したことはありませんが、無理につくる必要もありません。いないときは、ひとりの時間を楽しみましょう。風と一緒に踊ったり、ノートブックに心象スケッチを描いてみましょう。そこから何かが生まれるかもしれません。

この 2 日間は、あえて「障害」にフォーカスを当てませんでした。というのも障害のある人のパフォーミングアーツを考えるうえで大事なのは、「障害のある」という枠組みを外すことだからです。
福祉の現場のなかで、障害のある人とともに表現活動をおこなうと、既存の芸術ジャンルの「型」にはまらない、あるいははめられない人に必ず出会います。アートの専門家ではない、ケアというかたちで、障害のある人たちの表現に向き合っている人たちが、知らず知らずのうちに、「型」をこわしています。私たちはむしろ、このことに、既存のアートの枠組みを刷新させる希望の種を見ているのです。
困りごとだと思っていたものが、もしかするととんでもない宝物になる可能性を秘めているかもしれません。その瞬間をみなさんと一緒に共有できたら、どれほどうれしいことでしょう。

講　師　プ　ロ　フ　ィ　ー　ル

沼田里衣

大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授
おとあそび工房主宰

神戸大学総合人間科学研究科博士後期課程修了（学術博士）。日本音楽療法学会認定音楽療法士。技術や価値観の差異を超えた音楽づくりについて研究をおこなう。共著に『公共文化施設の公共性　運営・連携・哲学』（水曜社）、共訳書『分析的音楽療法とは何か』（音楽之友社）、『ソフトウェア・フォー・ピープル』（新水社）、論文「コミュニティ音楽療法における音楽の芸術的価値と社会的意味」（『日本音楽療法学会誌』第 10 巻第 1 号）など。
HP：http://riinumata.com/

いしいみちこ

ドラマティーチャー
追手門学院高等学校 表現コミュニケーションコース教諭

2001 年より福島県立いわき総合高等学校の総合学科の立ち上げに携わり、教科「演劇」のカリキュラムと系統的指導法について研究。2014 年より追手門学院高等学校の教諭として表現コミュニケーションコースの生徒たちに向けて表現教育をおこなう。2017 年、初の著書となる『高校生が生きやすくなるための演劇教育』（立東舎）を上梓。

森田かずよ

女優
ダンサー

Performance For All People -CONVEY- 主宰。NPO 法人ピースポット・ワンフォー理事長。ダンススタジオを運営しながら、自ら舞台に立ち、ダンスやからだのワークショップ講師やコーディネートもおこなう。砂連尾理ら毎回異なるゲストと踊る循環プロジェクト『≒ 2（にあいこーるのじじょう）』、ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2017、他、多数の出演作品がある。HP：http://www.convey-art.com/

梅田哲也

美術家

日用品や廃材といった身近なものを素材としたインスタレーション、都市空間や自然のなかでのサイトスペシフィックな作品を手掛ける。劇場の機能にフォーカスした舞台作品や、中心点をもたない合唱のプロジェクトなど現地の人を巻き込んだパフォーマンス作品を手がけ、パフォーミングアーツや音楽のフェスティバルにも参加。近年の展覧会に「Double Vision: Contemporary Art from Japan」（イスラエル）、「ソンエリュミエール、そして叡智」（金沢 21 世紀美術館）、「歴史する！ Doing history!」（福岡市美術館）。個展では「SCIENCE DE LA SUPERSTITION」（モントルイユ）、「See, Look at Observed what Watching is」（ポートランド）など。

中川真

大阪市立大学都市研究プラザ特任教授

京都大学文学部卒業、大阪大学大学院芸術学専攻修士課程修了。芸術文化博士。サウンドスケープ、サウンドアート、アジアの音楽、アーツマネジメントの研究をおこなう。サントリー学芸賞を受賞した『平安京 音の宇宙』（平凡社）の他にも、『サウンドアートのトポス』（昭和堂）、『アートの力』（和泉書院）などの著書がある。インドネシア中部ジャワの伝統音楽（カラウィタン）を軸に、ガムラン楽器をメディアとしたあらゆる演奏活動を試みる合奏団「マルガサリ」を設立。

佐久間新

ジャワ舞踊家

二十歳の頃、流れる水のように舞うジャワ舞踊家のベン・スハルト氏に出会い、自分のご先祖さまに会ったと直感する。その後、インドネシア芸術大学への留学を経て、現在は伝統舞踊におけるからだのありようを探求するなかから、「コラボ・即興・コミュニケーション」に関わるプロジェクトを推進中。ジャンルを超えたアーティストとの協働、障害のある人たちとのダンスワークショップや公演をおこなう。共著に『ソーシャルアート』（学芸出版社）。

佐藤拓道

俳優
たんぽぽの家スタッフ

横浜市出身。18 歳の頃より演劇を始める。主に俳優として活動する。チェルフィッチュ『ユビュ王』（岡田利規作・演出）、遊園地再生事業団『ニュータウン入口』（宮沢章夫作・演出）、マームとジプシー『sheep sleep sharp』（藤田貴大作・演出）などに出演。2011 年よりたんぽぽの家アートセンターＨＡＮＡに勤務。サービス管理責任者。演劇プログラム等を担当。演劇プログラムでは、演技するよりも再現することを重視している。声を大きく出すなど、訓練してしゃべらせる意味はあまりないと考えている。

金言集

レクチャー＆ワークショップ 2018.1.20-21
パフォーミングアーツを体感しながら学ぶ２日間

発行日：2018 年 3 月 31 日
発行元：一般財団法人たんぽぽの家
〒 630-8044　奈良市六条西 3-25-4
Tel 0742-43-7055　**Fax** 0742-49-5501
E-mail　artsoudan@popo.or.jp
U R L　http://artsoudan.tanpoponoye.org/

［**企　画**］
一般財団法人たんぽぽの家
［**編　集**］
後安美紀（一般財団法人たんぽぽの家）
［**写　真**］
仲川あい
［**デザイン**］
鯵坂兼充（有限会社スカイ）

※平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省）

※「障害とアートの相談室」ホームページより PDF ファイルを
ダウンロードできます。
http://artsoudan.tanpoponoye.org/

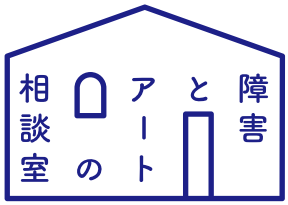
障害とアートの相談室

困ったとき・情報がほしいとき・学びたいときは・・・

たんぽぽの家では、障害のある人の芸術活動について、全国の福祉やアート分野の人たちとともに課題を共有し学びあう機会をつくってきました。2014 年から、障害のある人、その支援者の課題の解決、また情報交換やネットワークづくりの場として「障害とアートの相談室」をオープンしています。障害のある人の表現を通して、誰もが自由に表現できる社会、生き生きと生活できる社会をめざします。

障害とアートの相談室
で検索してみてください！
http://artsoudan.tanpoponoye.org

1　相談窓口の設置
2　研修事業　（施設見学ツアー、インターンシップ、セミナーなど）の実施
3　ネットワークづくり、作品、作家の調査・発信　（調査、書籍の出版、展覧会開催など）


障害とアートの相談室